

アメリカ大統領選挙で、二大政党の一つである民主党の候補者の1人の男性の伴侶が同性であるとして話題となっています。日本でも「LGBT」という言葉を見たり聞いたりすることが増えてきました。Lはレズビアン(女性同性愛者)、Gはゲイ(男性同性愛者)、Bはバイセクシャル(両性愛者)、Tはトランスジェンダー(性別越境者)、これら英語の頭文字を繋げた言葉がLGBTで、性的少数者と称されることもあります。少数者とはいえ、実は人口の8.9%(※)、11人に1人、とかなり多くを占めています。

そういう特性がなぜ生じるのかについてはまだはっきりしたことは分かっていません。また、性的指向性は、自分の意思でコントロールできることではありません。特に私たちが考えなければいけないことは、こうした性的指向性は生まれたときに分かるわけではなく、思春期に自分で気がつくことが多いということです。しかも、そうした子ども達の中にはLGBTについて知識を十分に持たない場合もあり、家族や周りの人々と違うことに不安を持ち、しかも、その内容を家族にさえ相談できない場合が多いと言われています。また、学校で仲間外れにされている

LGBT

と感じたり、言葉等のいじめを受ける子どもも多いと報告されています。不登校になる子も多く、中には自殺を考えたり、図ろうとした事例さえあるそうです。

テレビドラマ、ニュース、街角等でLGBTという言葉を見かけることが多くなりました。ですが、周囲の無理解や偏見、差別等がなくなっているわけではありません。私たちは色々な偏見や差別をなくし、皆が自分らしく生きていける社会を目指し少しずつ努力を積み重ねてきました。けれど、LGBTの人々への視線を顧み、反省し、共に生きていく社会を目指す取り組みはこれからのようです。

学校生活の中や、社会に出てからも、色々な課題があると思いますが、思春期の子どもが性的指向のことでいじめられたり、途方にくれることが少しでも減るように、大人が環境を整えることも大切ではないでしょうか。そう思う人が少しでも増えると、悩む子どもも減っていくのではないかと思います。

※電通ダイバーシティ・ラボ
2018年調査

■問い合わせ

人権啓発広報委員会

☎880・6569